

2015年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名：経済学部・教授・大高 博美

研究課題：音節構造に基づく日本語と英語の二重母音比較研究

研究期間：2015年4月1日～2016年3月31日

研究成果概要

「子音」「母音」と並んで、英語を学んだことのある者なら誰でも知っている音声学関連用語に「二重母音」がある。現在、アメリカ英語を例に挙げると、[aɪ], [eɪ], [ɔɪ], [aʊ], [oʊ], [ɪə], [eə], [əə], [ɔə], [ʊə] の十種が認められている（安井1992）。しかしこの用語は、実は、小野（2011）で指摘されたように、明確な定義の下で使われているわけではない。これまで様々な音声学者がそれぞれに二重母音を定義しているが、どれも決定的な学説となるには至っていないのである。日本語の母音を取り上げてみても、「二重母音」と「連母音(母音連鎖)」の術語が常に明確に使い分けられているわけではない。連母音の定義に使われている「一つの母音として実現されることが少ない」、「二母音は対等に結びついている」、「二つの母音の間に音響上の境い目が認められる」などの説明は、正しさにおいて自明ではないからである。この説明を読んで何となく分かった気にはなっても、客観的な見地から読者を納得させうる説明とはなっていない。実際、二重母音と連母音をソナグラム上でフォルマントの変化を基に比べてみると、残念ながら、「二母音間の音響上の境い目」の明瞭さにおいて両者に決定的な違いは見られないのである（加曾利2013）。

「二重母音」は、通常、どの音声学者による場合も「音節構造」と「聞こえ」という二つの観点から定義される。例えば音節構造を基盤とする定義の例を挙げると、「二重母音は一つの音節を形成する」（Jones 1960）、「一つの音節内で途切れなく移行する一つの音」（Kenyon 1951, 竹林1976）、「一音のように発音される二つの母音」（鳥居・兼子1969）、「音節核に現れる二つの要素からなる母音」（柘矢1976）、「母音連続の中で単一音節に収まるものを二重母音と呼ぶ」（窪園2002）、「二重母音とは一つの母音と見なせるものである」（Ladefoged 2006）などである。よって、例えば日本語によく見られる母音の連続（例：家 [ie], 声 [koe], クエ [kue] など）は、例外的に一音節に収まるとされる [ai] や [au] を除けば、どれも二重母音ではなく連母音であるということになる訳である（窪園2002, Vance 2008）。一方、上述のような音節に基づく観点だけからでは「二重母音」をうまく定義することができない。英語においても日本語においても、二重母音として認めがたい母音連続があるからである。また、上の定義では、ある種の母音連続がなぜ一音節として認められないのかが分からないままである。その最大の理由は、「音節とは何か」が明確に定義されないまま二重母音が定義されているからに尽きる。

上述の瑕疵を補うために導入されたのが、もう一つの視点「聞こえ度」(sonority) である。つまり、二重母音の第一要素の聞こえは第二要素よりも大きいというものだが、母音の聞こえは舌の高低に連動する（低舌化するほど聞こえは高くなる）ので、実際の定義においては第一要素から第二要素への「方向」が使われるときもある。例：「上向き二重母音」([ai], [ou], [ei],

[au], [ɔi], etc.) と「中向き二重母音」([iə], [ɛə], [uə], etc.) (鳥居・兼子 1969、栞矢 1976、竹林 1976)。これにより、日・英両言語において、ある種の母音連続がなぜ二重母音として認められないかが明らかとなる。しかし、ここでも再び問題が生ずる。シュワーは中舌母音で [i] や [u] の高舌母音より聞こえ度が高いはずなのに、何故 [iə], [uə] など二重母音として認められるのかという疑問である。

このように、音節内での聞こえ度の変化に着目する上述の定義も完全なものとはなっていない。では Ladefoged (2006) のように、聞こえの代わりに「プロミネンス (prominence: 卓立)」を使い、「二重母音の前半部分は後半部分よりもプロミネンスが高い」とすればここでの問題が解決するかといえば、そうでもない。置かれるプロミネンスの観点から、彼の定義により [ju:] なども二重母音と見なされる訳だが、これは本当に二重母音であろうかという疑問が拭えないからである。つまり、たとえ強勢が音節の出だしから始まるにしても、/ju:/ は頭子音としてのわたり音 [j] と核としての母音 [u:] から成る CV 音節とは考えられないのかという疑問である。

本研究の結論として、英語と日本語の二重母音には大きな違いのあることが分かった。音節をリズム生成の単位とみなすと、前者の場合その第二要素 (V2) は幾何学でいうところの線中の「点」として存在しているが (つまり、母音の生成・知覚に際して音長計測上幅のない点として処理される)、後者においては「線」として存在しているということである。言い方を換えれば、その際に使用される計測アクセント (起点と着点: それぞれ「線分 AB」の A と B に相当) の数と置かれ方が双方では異なるということである。